

8－12					
主題	当事者の想いを逐語録としてまとめた「わたしの想い」プロジェクトの効果				
副題	住民の気持ちに寄り添う支援と地域の醸成				
キーワード 1	当事者	キーワード 2	地域包括	研究(実践)期間	44 ヶ月

法人名	社福) 常盤会	事業所名	地域包括支援センターときわぎ国領
発表者(職種)	小嶋泰之(社会福祉士)、道脇絢子(社会福祉士)		
共同研究(実践)者	なし		

電 話	050-5540-0860	FAX	042-433-6488
-----	---------------	-----	--------------

事業所紹介	地域包括支援センターときわぎ国領は調布市の委託を受け社会福祉法人常盤会が運営しており、市内で高齢化率1位の地区を担当している。住民の身近な相談窓口を目指し、積極的に地域関係者との関係づくりに努めている。同法人は調布市内で特別養護老人ホーム、居宅介護支援、訪問介護、通所介護、保育園が併設する総合福祉施設を運営している。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

調布市(以下市)では平成16年より見守りネットワーク事業「みまもっと」を掲げている。市と協定を結んだ団体や地域住民、関係機関等が日常生活や業務活動の中で、地域の高齢者等の異変や生活上の支障に気づいた際、地域包括支援センター(以下包括)に連絡をいただき、必要な相談対応を行っている。

認知症施策推進大綱(厚生労働省、令和元年交付)の5つの柱の1つに「普及啓発・本人発信支援」が掲げられている。そのうち、認知症サポーター養成講座の開催を始めとする認知症に関する理解促進や、包括や医療機関等の相談先の周知(前述のみまもっと活動)は以前より積極的に行ってきたが、認知症当事者からの発信支援については手つかずの状態であった。「できるだけ本人の声を」と言われてはいるが、本人の声をどのような形で拾い、どう活用していくかの具体的な方法について包括で模索していた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

本人の声＝当事者の想いを「わたしの想い」という形にして発信することで、当包括の担当地域が以下のように醸成されることを期待し、本プロジェクトに取り組んだ。

- ① 同じ地域に住む当事者同士が対話し発信することで、地域住民全体が認知症や家族介護を「個人的な事柄」から「身近な事柄」「この地域の事柄」として捉えることができる。
- ② 包括に相談し介護保険制度はじめ様々なサービス・社会資源に繋がっていく、という流れを当事者の体験談から具体的に確かむことができ、地域住民に対する包括の周知活動の一環になる。
- ③ 当事者の声が地域の新しい社会資源を生み出したり、行政の高齢者施策に反映され、より暮らしやすい地域づくりのひとつの要因になる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

令和3年に本プロジェクトは開始し、当事者同士の対談を「わたしの想い」という小冊子に編集し、年1回の発行を目指した。認知症当事者に焦点をあててまず1冊作成したところ、住民や関係者に思いのほ

か好評であり、単発ではなく継続して作成し、テーマを認知症当事者だけでなく家族介護者や家族を亡くされた方の想いにもふれ、ケアラー支援や ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の要素も含めて内容をさらに広げ深くしていくこととした。

毎年テーマを設定し、話すことが可能な地域住民を選り、包括職員を進行役に当事者同士が対談を実施した。伺った内容は録音し文字起こしを行い、要約することなくその方の話し言葉、話し方をできるだけありのままに掲載し、その方の生の「わたしの想い」を表現できることを心がけたため、全文をほぼ修正していない。作成は包括の広報といえる見守りネットワーク担当と、認知症地域支援推進員（在宅医療連携推進業務も兼務）が中心となって行った。特に印刷業者に依頼せず、包括内で印刷・製本を手作業で行い、小冊子として毎回 100 部程度作成した。

①「わたしの想い Vol.1」（令和 3 年作成、約 10,000 字）は「認知症当事者」をテーマに、実際に認知症の診断を受けているが、様々な工夫をしながら一人暮らしを継続している方同士の対談を掲載。

②「わたしの想い Vol.2」（令和 4 年作成、約 13,000 字）は「家族介護者」をテーマに、自宅で夫を介護してきた妻の想いに焦点をあて、当包括が開催している家族介護者の語らいの場「ケアラーカフェ in 染地」の活動の一環として、公開対談という形で実施し掲載。

③「わたしの想い Vol.3」（令和 5 年作成、約 17,000 字）は「病気で家族を亡くし、残された家族」をテーマに、夫を病気で亡くされた方と姉を病気で亡くされた方の対談を掲載。

《4. 取り組みの結果》

「わたしの想い」は包括が年 3 回開催している地域ケア会議（行政や社会福祉協議会・地域関係者・医療介護関係者が一同に集い、地域の諸課題について意見交換を行う会議。毎回約 50 名が参加）において配布を行っている他、包括が隔月で開催しているケアラーカフェや、市が主催している認知症サポート月間のシンポジウムでも配布を行った。またこの存在が口コミで広がり、所望された方にもお渡ししている。また、気軽に読めるようにしてほしいという地域住民の声もあり、インターネット上のブログにも全文掲載もしている。地域住民のためのツールではあるが、行政やケアマネジャー・訪問看護といった医療介護関係者にも地域に住まう当事者の想いを知っていただく機会となりえた。

《5. 考察、まとめ》

「わたしの想い」はたとえ認知症になっても、家族の介護が必要になっても、家族の死が迫っていても、この地域で生活し続けることができるかもしれないという希望を示した書であるといえる。それは地域包括ケアシステムを行政や支援者側の感覚でなく、住民の感性から表現したものといえる。あくまで当事者が主となり、出版ではなく手作りで 1 冊 1 冊作り上げたからこそ、その想いを大切にしたいという姿勢を示せた。本プロジェクトに対し行政はじめ多数の高評価をいただいており、また包括の役割を具体的に知っていただく機会と成り得たが、単なる読み物で終わらせることなく、当事者の声を活用しさらに具体的な地域づくりのアクションや施策へ反映させていくことが次のステップである。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

ルポ 希望の人びと（2017）朝日新聞出版

《8. 提案と発信》

日頃様々な業務に追われている包括であるが、当事者（地域住民）の想いをおさなりにしてより良い「地域包括支援」は成し得ないと考えている。住民の気持ちに寄り添う支援、そしてより良い地域の醸成のため、具体的な取り組みを引き続き今後も展開していきたい。